

全国NICU退院児における在宅経管栄養の実態調査

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者 奥 起久子

共同研究者 田村 健一、石田 東生、山南 貞夫

要約：全国の主要な新生児集中治療施設106施設に1989年に入院した病的新生児23964名中、在宅経管栄養となった症例は104名であった。

原因疾患は、先天奇形、重症仮死後遺症、呼吸循環器疾患、先天性筋疾患等で、現在保険上の経管栄養の適応疾患である栄養障害に該当す疾患はなかった。経管栄養以外に吸引器の使用、気管切開、在宅酸素療法などの他の在宅治療をも必要とする児が1/3を占めており、多方面にわたる医療ニーズを持っている事がわかる。

在宅医療を推進する立場から、これらの児に対する経管栄養の保険適応を含めて建設的な提言が寄せられたが、また一方経管栄養に消極的な立場の施設からも問題の提起があった。

見出し語：在宅医療、NICU退院児、経管栄養

研究目的および方法：NICU退院児での在宅治療の中では、経管栄養が最も多いかと思われる¹⁾。そこでその実態調査の目的で、石塚らのNICU基準²⁾を満たしていると考えられる全国の新生児集中治療施設149施設を対象としたアンケート調査を行い、106施設から回答を得た(回答率71%)。ここで言う経管栄養は内科的疾患に限定し、外科疾患の治療として行う場合は除外した。

結果と考案：① 経管栄養児の実態

1989年1月1日から12月31日の1年間にこれらの施設に入院した病的新生児(未熟児を含む)のうち、在宅経管栄養を行っている症例が

あった施設は106施設中54施設(51%)で、総入院数23,964名中在宅経管栄養症例数は104名であった。長期入院中の予備群をもつ施設を含めると73施設69%となり、予備群と考えられる症例は62名であった。

在宅となった104例の原因疾患は、Majorな先天奇形(奇形症候群、染色体異常、中枢神経系奇形を含む)が最も多く、以下重症仮死後遺症、ピエルロバン、トリーチャー・コリンズ症候群など口蓋奇形、Bronchopulmonary-dysplasia、心不全など呼吸循環器疾患、その他の脳障害、先天性筋疾患の順であった(図1)。在宅開始時期は、1ヶ月から16ヶ月まで平均4.9ヶ月であった(図2-月齢上限は入院年度とア

ンケート時期の関係で24ヶ月である)。

経管栄養以外に他の在宅治療を要する児は、104例中32名(31%)あり、その内訳は吸引器の使用、気管切開、在宅酸素療法、気管内挿管、中心静脈栄養、CAPD(持続的外来腹膜透析)(重複あり)である。(図3)

② 各施設における在宅経管栄養児の管理

この年度以外をも含めた在宅経管栄養児の経験施設は106施設中100施設(94%)で、殆どの施設で経験がある。在宅中のチューブ交換場所としては、医療機関と自宅があい半ばしていた(図4)。また家族に対する指導が看護婦のみという施設が20%あった(図5)。95施設中8施設では在宅中に経管栄養に起因するトラブルを経験したとの回答があり、その内訳を表1に示した。

③ アンケートに寄せられた意見

今回の調査で扱った症例中には、現在の保険上の在宅経管栄養の適応に該当する疾患は除外した外科疾患を含めても1名もなかった。ここで扱うような症例も適応すべきとする意見が多く施設から寄せられた(103施設中100施設)。但し自己負担が増えない条件で、との付帯条件つきが多かった(103施設中71施設)が理由は、乳児医療の制度がない東京都や、制度があってもその対象年齢を過ぎている場合、障害者手帳

等の医療補助対象になっていない患者ではかえって自己負担が増えることになるケースがあるからと思われる。経管栄養に必要なデバイス製品等は、退院後は患者が自己負担しており、入手経路も医療側で特別に便宜をはからないと病院で入手できないなどの不便は解消されるべきであろう。

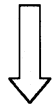
また在宅医療を推進する立場から、今後の課題として、寄せられた意見として、

- a. フォロー外来の充実(医師等マンパワー充足)
 - b. 訪問看護制度等の充実
 - c. バックアップ体制の地域化の必要性
 - d. 緊急時の医療、収容施設の保障
 - e. 関連領域の専門家の参加
- があげられた。

一方少数の施設からであるが、在宅治療に批判的な意見も寄せられた。

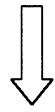
文 献：

- 1) 仁志田博司：障害を有するNICU退院児のホームケアシステムの現状と問題点、小児科臨床、41：691-99, 1988
- 2) 石塚祐吾ほか：わが国のNICUの現状と超未熟児の死亡率、日児誌、93：2336-41, 1989



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:全国の主要な新生児集中治療施設 106 施設に 1989 年に入院した病的新生児 23964 名中、在宅経管栄養となった症例は 104 名であった。

原因疾患は、先天奇形、重症仮死後遺症、呼吸循環器疾患、先天性筋疾患等で、現在保険上の経管栄養の適応疾患である栄養障害に該当す疾患はなかった。経管栄養以外に吸引器の使用、気管切開、在宅酸素療法などの他の在宅治療をも必要とする児が 1/3 を占めており、多方面にわたる医療ニーズを持っている事がわかる。

在宅医療を推進する立場から、これらの児に対する経管栄養の保険適応を含めて建設的な提言が寄せられたが、また一方経管栄養に消極的な立場の施設からも問題の提起があった。